

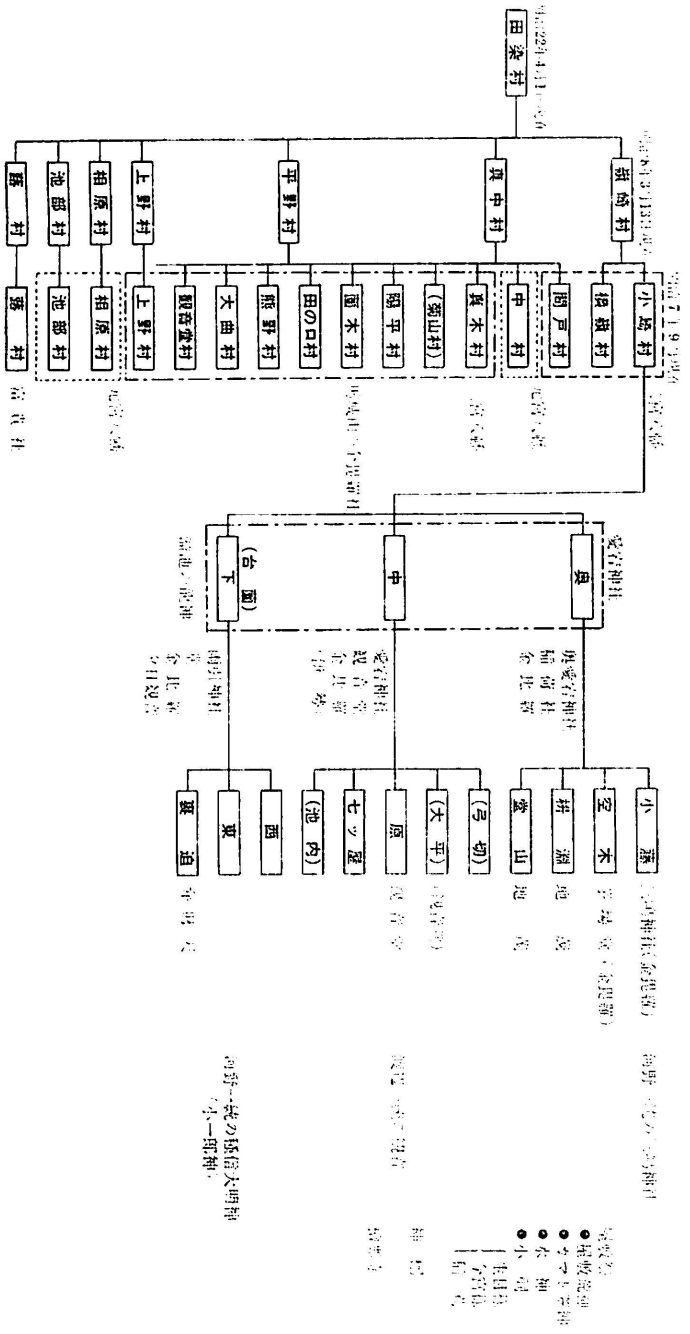
村落構造と信仰

段上達雄

一 はじめに

本稿は昭和五六年度から本調査を始めた、国東半島莊園村落遺跡詳細分布調査の民俗信仰部門の中間報告である。この部門の調査は、村落構造内における信仰の位置づけを目的としている。その対象地域は、宇佐八幡の重要な莊園であった田染荘が置かれた、豊後高田市田染地区である。県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が中心となって調査を進めており、考古・歴史・美術史・民俗の各部門の担当者が協力して、田染を総合的に研究しようというのである。大字嶺崎字台蘭には莊園であった田染宇佐氏の城館跡が残されており、鎌倉時代後期における宇佐八幡宮の支配の拠点であった。そのため、台蘭のある小崎から全部門の調査が始められた。民俗信仰部門の昨年度の調査は、小崎地域（ここは近世においては小崎村）の原と台蘭の両集落を中心に、堂祠の所在確認と、信仰についての聞き取りを行なうことであった。

このフィールドにおける村落構造をどのように再構成するかが、まず第一の課題となった。地理的条件や社会的条件を基礎におき、範囲の広い順にⅠからⅣのクラスに分化してみた。クラスⅠは明治二二年当時の田染村の範囲で、中世の田染荘とはほぼ同一の地域である。クラスⅡは明治八年当時の村々の段階で、七カ村に分化している。クラスⅢは近世村落の段階となり十六カ村に細分化されている。今回は当時の小崎村をフィールドに選んでいるので、ここをもう少し詳細に再構成してみよう。小崎川の上流から地理的集落を列挙してみると、空木（五戸）と小藤（三戸）、その下流の合流点にある榊刈（三戸）、堂山（二戸）、原（十五戸）、七屋（三戸）、台蘭（二十六戸）。ここでは昭和初年頃には消滅していた大平、弓切、池内も含めて



表にしてみた。中心集落の台園は戸数も多く、三つの組に分かれている。この三つの組と集落とを合わせて、クラスVとして位置づけた。この集落群は、小崎川の上流から順に、奥、中、下(井台園)とにまとめられている。これをクラスIVとする。クラスVIは、集落等の地縁性を離れ、血縁性の強い一統とか、組とか講等の組織の段階となる。クラスVIIとなると、家々の段階にまで細分化される。この下には個人の段階として、天理教等の新興宗教等の滲透を挙げることができるが、今回は省略する。

二 田染三社八幡と雨乞い

田染地区が宇佐八幡宮の支配下にあったことは、田染に三社の八幡社が残されていることからあきらかである。元宮、二宮、三宮の三社は田染の各近世村落の集合の上に成立しており、田染地区の代表的な神社群といえる。元宮の氏子地域は近世村落でいえば、中村、相原、池部村であり、二宮のそれは小崎村、横嶺村、間戸村である。三宮の場合は真木村、菊山村、陽平村、蘭木村、田の口村、熊野村、大曲村、観音寺村、それに上野村の各村である。ここで注目しなければならないのは、落村が田染三社と関係が無いことである。落村では独自に富貴社を祭祀しており、田染地区でも特異な地域である。落村は桂川の支流である落川の谷筋に成立しており、他の田染の村々は桂川の本流域に分布している。落村は中世においては糸永名と呼ばれ、田染荘の中に含まれる。しかし、寛元三年(一二四五)七月三日の宇佐大宮司下文案(永弘文書一—37)に糸永保と書かれている。保は国衙領を意味している。これは落谷の開発が宇佐八幡宮によって開発されたのではなく、当時の国衙の官人によって開発された可能性があることを物語っている。荘園開発における主体の相違が、現在の信仰圏にまで影響を及ぼしているのである。

さて、田染荘が開発された平安時代初頭に勧請されたと考えられる元宮八幡社は、中村の現在の早神社はやかみじやの地に宇佐八幡宮よりまず分祀され、その後現在地の中村宮田に遷移されたと伝えられている。そして観応二年(一一三五)に二宮と三宮とが分

祀され、二宮は間戸に、三宮は稲積にその社殿を構えたとされている。

田染三社の祭の中で、最も盛大であったのが秋の大祭である十月祭である。これは三社合同の祭礼で、田染全域（蔭村を除く）の祭である。年に一度三社の神輿が合流するのである。戦前までは旧暦十月八日と九日に行なわれたが、戦後には新暦十一月八日と九日となり、現在では十一月八日前後の日曜日にだけ行なわれるようになった。ここに紹介するのは戦前の十月祭の様子である。八日午後二時より、田染三社の神輿がそれぞれの社前を出発して、各氏子地域の集落を巡行して上野の五本松に集合する。ここは市場に近い水田で、大注連縄が張ってあった。個別に祝詞をあげてから、元宮の神輿から順次市場にある御旅所に向う。到着後、御旅所前の馬場で流鏝馬を五回行なってから、再び祝詞をあげる。その夜、峰入りの神事が行なわれる。御旅所前に円陣を作り、仮面をかぶったり、サナ（蒸籠の簀）を頭にいただいて踊り狂ったのである。お囃子に太鼓や笛それに鉦を打ち鳴らした。次に相撲の奉納があり、デート（大稻）渡しが行なわれる。これは翌年の神酒（白酒）を醸すために播く稲穂を、次の年の神酒供御田を耕作する者に渡す儀式である。それから祭の参加者に白酒がふるまわれる。次に神楽が奉納されて、その日の神事は終了する。神事が行なわれる一方で、その夜は俳諧百韻の奉納があったり、御旅所近くの河岸の小屋で芝居がかかったりした。九日の未明、寒い中で朝座の御饗をとる。午後になると再び流鏝馬を行ない、夕刻には神輿はそれぞれの神殿に戻った。

田染三社の特殊な神事に雨乞いがあった。近世村落ごとに、年年恒例の雨乞いの神事が行なわれていたらしい。例えば小崎村では愛宕神社での川潮汲みがある（後で詳述）。しかし、いざ干魃となると、それではすまなくなる。まず田染三社各自での潮汲みが行なわれる。二宮の場合は、三カ村の雨乞いといって、小崎村と横嶺村と間戸村の人達が、桂川の鋸淵に行き、川潮を汲んで二宮に戻り、社殿に川潮をかけて雨乞いをする。鋸淵は、蔭村を除く田染地区の中で、最も桂川の下流に位置している。それでも降雨が無い場合は、田染三社の氏子全域の村人が、揃って大潮汲みに行く。鬼を従えた行列がつくられ、豊後高田市の磯町までゆき、海潮を汲んで帰り、田染三社各社殿に海潮をかける。大潮汲みは、昭和十二、三年頃に行なわれたの

が最後だという。これでも雨が降らないとなると、最後の手段として、川勸請が行なわれる。明治八年八月と明治十六年七月、それに昭和四年九月に川勸請が行なわれた。昭和四年の川勸請の様子は、現在も元宮の拝殿に懸けられた大絵馬に見ることができる。この川勸請の記念大絵馬は、田染三社それぞれに奉納されたという。澁淵に竹筏を組み、その上に田染三社の神輿を安置する。雨が降るまで、神輿はその仮宮に留まり、人々は河原で御籠りをするのである。同時に、西叡山中にある戸無戸の口にも参詣して、雨乞いをする。戸無戸の口は、岩陰の湧水で、常時水をたたえているという。そこには大蜘蛛がおり、湧水を守護しているので、普断は決して人が近づいてはならないとされている。以上のように、干魃の程度が進むにつれて、雨乞いの方法もエスカレートするのである。

第一段階 愛宕神社の川潮汲み（近世村落クラス）

第二段階 二宮神社の川湖汲み（複合近世村落クラス）

第三段階 田染三社の大潮汲み（近代村落クラス）

第四段階 田染三社の川勸請（近代村落クラス）

現在では、雨乞いの神事は行なわれていない。しかし、最近では、昭和三年の干魃の時に、陽平の観音堂で雨乞いが行なわれている。その雨乞いでは、走水の観音以下三カ所に、水もらいに行ったという。田染地区内でも、さまざまな雨乞いの方法があったらしい。雨乞いは、地域によって、方法がいろいろあった。院内では、干魃がある段階までくると、寺院の鐘を淵に沈めたそうである。雨乞いについては、これからの調査研究が進むことが望まれる。

三 近世村落神

田染三社は、近世村落の集合体によって、祭祀されてきたが、近世村落各自にもそれぞれ村落神を祀ってきた。小崎村では村落神として、前述の愛宕神社が祀られている。愛宕神社は、宝暦五年（一七五五）の六郷山百八十三カ所霊場記に、愛宕山

大権現として記載されている。神仏分離以前の近世において、愛宕大権現は勝軍地藏を本尊としていた。現在でも石塊の御神体に混って、木造地藏菩薩像が祀られているという。

京都洛西の愛宕神社は全国愛宕社の総本社といわれ、防火神としての信仰を集めている。本地仏はやはり勝軍地藏である。勝軍地藏は経軌に記載されていない。鎌倉後期に発生した特殊な地藏信仰で、悪業煩惱の軍に勝つ剣を持つ地藏菩薩という意味を持つが、その名称から、戦勝をもたらすと考えられて、中世末期に武士層の信仰を得て流行した。

小崎の愛宕神社は、原の集落の南西の丘陵上にあり、空木の奥愛宕神社から分祀されたといわれている。戦前までは、旧暦七月十六日に、川湖波みが行なわれていた。午前中に雨乞いが行なわれ、午後から風止め祈願が行なわれた。現在では、新暦八月十六日に、風止めだけを行なっている。

田染宇佐氏の城館跡の東側の小崎川の岸は、ドンマエ（堂前）とか、ビョウノマエ（廟前）とか呼ばれている。小崎の各家の戸主が、ここで川潮を汲んで、行列をなして愛宕神社に詣でたのである。一尺ぐらいの長さに切った女子竹（雌竹）の中に塩を少し入れて、川水を汲む。水がこぼれないように、女子竹の葉をさしておく。堂前で神官が御祓いをしてから、行列は出発する。行列の先頭には御幣が立った。一間程の長さの角棒の先に、幣が沢山つけてあった。次に、ノシツケが進んだ。長い真竹の先に、御幣と笹がつけてあった。ノシツケは、堂前の御祓いの時に、堂前に立てられたので、三本のひもがついていた行列より少し遅れて、二匹の鬼が暴れながらついていった。

誰が、愛宕神社の信仰を、持ち込んだのであろうか。それは、修験者ではなかったらうか。川湖波みの行列の先頭を進む御幣を奉持するのは、原の加藤家が代々行ってきた。原の家々は本来、渡辺姓ばかりの血縁集団だったという。渡辺家の墓地は、一カ所に集められているが、加藤家の墓地は、愛宕神社のある丘陵の中腹に独立して存在している。この墓地には、石塔型の墓石と共に、石積みの墳墓が一〇基近く残されている。石塔型墓石に僧階位が刻まれているのは、注目しなければならない。

大越家安性院栄音靈位 明和二年（一七六五）

権大僧都大越家大光院明寿 文化一〇年（一八一三）

権大僧都惠光院妙寿 天保二年（一八三一）

権大僧都法印金藏院 天保九年（一八三八）

権大僧都教山院法印 慶応四年（一八六八）

大越家とは、熊野や大峰山に九度以上入峰して、修業した修験道の行者に与えられる山伏位階のことである。加藤家は、山伏の家だったのである。愛宕神社参道の石段の途中にある石造手洗鉢に、東之坊、西之坊、元文五年（一七四〇）と刻まれている。加藤家は、この東之坊西之坊と関係があったと伝えられている。元和八年（一六二二）の小倉藩人番改帳四（大日本近世史料）に小崎村山伏一軒、山伏二人と書かれている。加藤家の系譜は、近世初頭までたどることができるようである。加藤家が愛宕信仰を持ち込んだかどうかは断定できないが、愛宕信仰と山伏との関連はあったと思われる。本来火除けの神であった愛宕神社は、雨どいの川潮波みや風止めにみられるように、農耕神としての性格を持たされているのである。

四 複合集落神

愛宕神社の祭は、川潮波みだけではない。旧暦六月二五日に、若者籠りがあって、小崎中の若い男達が集った。次の日から台園にある延寿寺で、毎晩寄りが行なわれ、盆踊りの太鼓やくどきの練習が行なわれた。約二〇日間稽古が続き、七月十三日の夜に供養踊りが行なわれた。初盆の家を踊ってまわったのである。

旧暦十一月四日と五日は、小崎の霜月祭であった。田染中から参詣者があり、四日の甘酒祭では、座前が仕込んだ白酒を飲ませたという。

小崎の村落神である愛宕神社は、その所在地である中組の集落神でもある。若者籠りの前日には、中組の家中籠りがあつた。中組の人々が一家総出で社前に集り、御馳走を食べたのである。各家が赤飯を持参した。小豆やミトリ豆の入った赤飯が多く、中にはウズラ豆で作った赤飯もあった。ミトリ豆は小豆に似ているが、それで作った赤飯はまずかつたという。赤飯はサカイジュウという大きな重箱に入れていた。これは、十何段もある大きな重箱で、入れ子になっていて、収納には便利だったという。この時、持ち寄った赤飯は、まず御供として神前に供えた後、それぞれ交換しあつた。小崎では、同じ日に、奥組は奥愛宕神社へ、下組は雨引神社にそれぞれ集つて、家中籠りをした。家中籠りは、田植えの後の農休みの行事であると考えられる。また、それより少し遅れるが、田の草取りの頃に、愛宕神社の座前の家に、中組の戸主達が集まつて、食べきれない程のウドンを喰つたという。

小崎の霜月祭の前日に、中組だけの霜月祭が、愛宕神社で行なわれた。この祭には、神官は参加しない。この祭は、講組織によつて行なわれ、講の基金で飲食等の費用が賄われていた。基金を年一割の利子で講中に貸して、その利子を使ったのである。基金は千数百円あつて、戦前だと水田二反は購入できたといわれている。今でも、その基金は増額されていないので、利子といっても役に立たなくなっている。元金と利子が揃わないと、祭を始めることができない。昔は元金と利子をあわせて工面するのは大変だったらしく、夜になってようやく祭ができたことさえあるという。

台園で祀っている雨引社は、水分社ともいわれ、天水分神と国水分神とを祭神にしている。しかし、由緒ははっきりしない。石祠自体には、明治三四年、石鳥居には、天保十四（一八四三）と刻まれている。創建はそう古くないと伝えられている。台園の下を暗渠で通る間歩^{まが}井堰が開鑿された時に、水神として祀られたという。雨引社の山側の地名を、ゼミノクチという。このあたりでは、湧水が出ることを、ゼミが出るという。なる程、この雨引社近くの水田は、湧水が豊富である。速見郡日出町の沖合の海底に潜つて、最初にさわつた石を持ち帰つて、御神体にしたといわれている。宇佐国東には、石塊を御神体にしてゐる小石祠が多い。その中のいくつかには、貝殻が付着したのが見うけられるので、海底から持つてこられたものであるこ

とがわかる。

小崎の奥、中、下の各組で祀っている神に、金毘羅様がある。すべて小高い丘陵上が岸上に位置しており、石祠の前には小さな広場があり、そこから家々を見おろせるようになっていいる。そのため、地元では金毘羅社のことを高神様と呼んでいる。原の金毘羅社は、旧暦三月一日と同九月一〇日と、年二回お祭りをしていたが、現在では新暦四月一〇日に行なうだけとなった。座前が三軒あり、祭の時の料理を作る。油で炒めた高菜、ちもと（わけぎ）を刻み込んだおからの酢和え、山椒の葉をすりこんだ和え物、ごぼうと人参と豆腐とをすりこんだ和え物、ごぼうと人参と豆腐と昆布と馬鈴薯の煮物等の肴を作った。祭には、原の老若男女すべてが、金比羅社の前の広場に集まり、むしろを広げ、各自に渡されたつわぶきの葉を皿の代りにして、酒のみ、肴を食べたという。現在は、各戸から一人ずつ出席するだけである。

金毘羅様は、一般には海上交通の守護神として有名である。しかし、海から五キロ以上も内陸部の田染には、各地に金毘羅社が祀られている。地元の人達に尋ねたが、金比羅神の信仰の内容はわからなくなっていった。祭の内容からすると、山遊びとか山見とかいわれる、農耕儀礼の一種ではないかと思われる。春と秋に、自分達の領分を見晴らす丘に登り、共同飲食を行ない、生産をもたらす大地へ感謝するのである。讃岐の金毘羅宮は、海上守護神としての性格の他に、雨乞いと風止めの神としての性格もあるという。（『金毘羅庶民信仰資料集』）金毘羅神は、農耕神としての性格も持っているのである。それが伊勢講の次に、金毘羅講が全国的に分布している理由といえそうである。讃岐の金毘羅大権現は、近世になって、急激に信仰圏を広げていった流行神である。その信仰の媒介者として、金毘羅道者という職業的宗教者達の存在を考えることができるが、まず修験者達の活動を第一に考えた方が良いと思われる。讃岐の金毘羅社のある象頭山は修験道の行場であり、近世の蟹開帳事件の大半が、修験者によって行なわれている（『山岳宗教史研究叢書12』）ことから、修験道と金毘羅信仰との関係が深いことがわかる。どのような宗教者であったかは、現在明言することはできないが、古来から伝わった山遊び等の農耕儀礼に、農耕神としての金毘羅神を結合させたのではないだろうか。

田染に散在する金毘羅神の石祠の造立年を、銘文で見ると、一九世紀初頭の文化文政期から幕未までの五〇年間であることに気がつく。

原の金毘羅 文政元年（二八一八）

台崗の金毘羅 安政二年（二八五五）

空木の金毘羅 天保十一年（二八四〇）

真木の金毘羅 文化十五年（二八一八）

岩脇の金毘羅 嘉永三年（二八五〇）

元宮の金毘羅 文化二年（二八〇五）

同右 文化十年（二八一三）

同右 文化十四年（二八一七）

同右 文政九年（二八二六）

真木の金毘羅社は、馬城山頂にあり、明治十一年に元宮に合祠されるまでは、拝殿も持つ神社であった。他の石祠と比べれば、大型の石造社殿が今でも残っている。これは、真木村だけが氏子ではなく、上野、陽平、蘭木、田の口、大曲、観音堂、菊山の各村が氏子となっており、かなり広範囲な近世村落の集合体によって、祀られていたことがわかる。元宮の金毘羅は、明治十一年に、田染各地から合祠されたものである。

愛宕様にしろ金毘羅様にしても、いずれも神仏混淆系の神々である。仏教系としては、弘法大師信仰を田染各地の堂様に見ることができる。観音堂等の片側に、大師の石像が祀られており、春と夏とに御接待が行なわれる。天台宗と浄土真宗が圧倒的に強い田染地区にも、真言系の大師信仰が滲透してきているのである。観音信仰を導入口として、大師信仰がもたらされたと考えられる。その時期はさほど古くはないと考えられるが、今後の研究課題としておこう。

原の堂様では、旧暦三月二日と同七月二日とに、お接待を行なっていたが、現在は一カ月遅れの新暦の日に行なっている。お大師様は作神様だから、お供えは、季節にあるもので作るのだといわれている。春はフツ餅（ヨモギ餅）を供え、夏は収穫したばかりの小麦で、フクラシ餅（蒸し団子）を供える。両方ともアン入りの団子で、鏡餅と同様に重ねて供える。昔は小さなフツ餅やフクラシ餅を作って、参詣者にくばったという。弘法大師も、農耕神としての性格を持たされているのである。

五 一統の神々

集落神や村落神のように、地縁性によって支えられている神仏とは、別な系統に属するのが、血縁性によって成立している一統の神仏達である。

原の堂様には、渡辺一統の観音様が二体祀られている。十二月十八日の祭には、原の渡辺姓の人々が、座元の家に集って飲食をする。観音様の隣と呼ばれる水田を、座前の人が耕やして、その収穫で祭の費用をまかなっている。戦前には六畝あったが、今では場所も移り、面積も小さくなっている。

台鹽には、種信一統という組織があり、昭和初期まで歩射をしていた。小一郎墓と呼ばれる藪の中に、種信大明神が祀られていて、歩射の大的を供えた。歩射の時に作った鬼と書かれた小的は、馬屋の軒にさして、馬の守神にしたという。小一郎種信は、種信一党の祖先と考えられており、弓と乗馬の名人であったと伝えられている。

六 家の神々

仏壇の隣の床の間が、神棚として使われている。ほとんどの家では、伊勢皇大神の掛軸が掛けてある。中には三社託宣（伊勢、八幡、春日）の掛軸のある家もある。伏見稲荷の社殿や弘法大師の石像を、床の間に祀っている家もある。伊勢の護符は

毎年神官から配布される。

家々には必ず屋敷荒神とカマド荒神、それに水神が祀られている。屋敷荒神は、家の裏手に、小石祠を作って祀っていることが多い。銘の入っている石祠は少ないが、近世までさかのぼる物は、ほとんど無いようである。今でも菽荒神といって、母屋の裏の藪の中に、石塊が屋敷荒神として祀られている所がある。井戸や湧水等は水神として祀られているが、石祠が作られているケースは少ない。カマド荒神は、カマドやガスコンロの上の壁に、御幣を立てて祀っている。

原では、年に一度、十二月中旬に屋敷祭が行なわれて、屋敷荒神やカマド荒神、それに水神に御幣が立てられ、お祓いをする。台圃では、年二回、社日の日に行なわれる。社日とは、春分と秋分に最も近い前の戌の日のことで、社日様は作神様だから、春と秋の社日の間が長い年程豊作だといわれている。

屋敷祭には、座前の家に神官が来て、御幣を作り、座前が案内して集落内をまわる。留守の家が多いが、次々にお祓いをしてゆく。神官への謝礼は、昔は玄米二升だったというが、今は現金を座前が集めて回る。小崎の屋敷祭を行なう神官は、横嶺に住む黒住教の渡辺敏喜代氏で、二宮八幡、横嶺の高良社、小崎の愛宕社、露の山神社と富貴社と熊野社、それに東都甲の巖島神社の神官をしている。

以上見てきた村落構造内の神仏の位置づけは、まだ調査途中のものでしかない。しかし、信仰の媒介者としての修験者の活動や神仏の農耕神化という現象は、興味深い問題を投げかけてくれる。田染の地域性を明らかにするために、これらの信仰の導入時期、信仰の性格、村落構造での位置づけを、今後も調査研究してゆく必要があるのではないかと思っている。

(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員)